

ホームページ http://www.geocities.jp/tohoku_univ_wv_ob/

メールアドレスの変更は利根川さんに連絡して下さい：s-tonegawa@ac.auone-net.jp

復興が始まった女川からの便り

9期（昭和45年卒）藤中 郁生

OBの皆様には、たくさんのご支援を頂き、ありがとうございます。

女川の現状

女川は、瓦礫も順調に処理が進み、空き地がどんどん増えています。今月になって、山を切り崩し、宅地を造成する工事の起工式が2カ所で行われ、年明けから工事が始まるようです。宅地は27年、公営住宅は26年完成予定です。



左 望郷山から見た港風景

右 医療センターから見た中心街

下 女川駅があった場所



女川の駅があった場所は海拔8mくらいまでかさ上げし、区画整理の後新しい駅と商業地区ができる予定です。我が家は左半分の中央辺りにありました。宅地造成が遅れているため、先が見えないと町外へ宅地を求める人が出てきています。人口6000を切る可能性が出てきたようです。

私は、再来年度廃校となる、高校のグラウンドにできた仮設商店街の一角で塾を再開しております。通塾が困難なため、生徒数は一学年6～7名と激減ですが、気楽にやっています。桜守りの会のほうは、預かる苗が大漁桜100本、仙台枝垂れ50本、染井吉野70本、しだれ花桃50本、と大変な量になってしまいました。まだ植栽できる場所がなく、商店街の一角で世話をしています。同期の伊藤君には、いつも助けられています。さらに、女川の自然環境の保護と山林を観光資源としたり、環境教育の一環に使ったりという目的で女川ネイチャーガイド協会というNPOを立ち上げる準備を始めました。私は主に散策ルートの開発をやろうと思っています。TUWVで培った知識や経験がおおいに役立っています。

山行きのほうもやっと、行くことができるようになりました。山道具はすべて流失しましたが、避難後すぐ、ザックとシュラフを購入。9期を始め、先輩後輩からいただいた炊事関係の諸道具とともに避難生活で役に立ちました。それこそTUWVの経験があればサバイバル生活も十分可能です。今年に入って念願の山靴を買うことができました。

7月には小原さん、中里さん、石野君、原田君、伊藤君と船形山。9月末には、伊藤君、中里さんと神室へ、11月のはじめに単独で山伏岳へ行くことができました。来年は残雪の船形から始めよ

うと、足腰を鍛えようと、できるだけ歩くようにしています。
これから、3月はじめまで正月以外無休でがんばります。みなさん、よいお年を迎えて下さい。



船形山



神室山



山伏岳

藤中サポート基金からのお礼・お知らせ

9期(昭和45年卒)桃谷、石野、原田、伊藤

昨年のOB会報にて同期藤中郁生君の被災状況を紹介したところ、7期の先輩を始め多くの皆さんから基金拠出をいただきました。大変ありがとうございました。以下、基金運営の概要をお知らせします。

- * 昨年末に藤中君がNPO主宰塾)向学館を辞し、仮設商店街の一室を借りて独自に“藤中塾堂”を開設するにあたり、基金より資金援助をさせていただきました。
- * 現地ボランティアにて藤中君への直接・間接の支援につき、レポート作成を条件に交通費補助を行っています。11月のボランティアの際には、藤中君知人の住宅(津波に耐えて残った“奇跡の家”)の残存原因を探るべく、7期真尾様と専門家の方が調査に訪れ、現地の方が大変喜んでいました。
- * 情報交換を続け、年初、腰痛・咳に悩まされていた藤中君が元気になり、忙しい塾運営の合い間に山に行けるときは、サポートメンバーに参加を呼びかけています。ただし、彼の好みは山頂避難小屋泊まりが多く、食事付き山小屋泊まりに慣れた身には、ザックが多少ならず重く感じます。

今後につきましては、少なくとも藤中君が仮設住宅を抜け出すまで基金運営を継続したいと考えております。具体的には、

- * 基金への拠出を歓迎いたします。ときに“臨時収入が有ったので拠出させて”といったお申し出もあり、大変ありがたく受け取らせていただいています。拠出ご希望の方は会計石野にメール連絡して下さい。振込み口座番号等をお知らせします(メールアドレス: QZM10211@nifty.ne.jp)。
- * 2013年の8・9期OB山行は、いつもの9月頃、女川温泉華夕美泊にて、女川ネイチャーガイド協会)藤中君の案内で女川山脈への登山を計画しております。基金拠出された先輩・後輩の皆さんにも連絡を差し上げますので、ぜひご参加下さい。

先般、伊藤が女川に行った際、藤中君の案内で昼食に“海鮮丼”を食べました。右の写真のように豪華・美味！他にも穴子丼の美味しいところなど、お店・宿泊施設が結構あるようになりました。風光明媚な女川観光等、機会があれば是非女川に立ち寄って藤中君に声を掛けて下さい。



第04期同期会報告—九州旅行

4期(昭和40年卒)幹事グループ(竹井、八木、野村)

我々同期の会(幾久会)は卒業後、ほぼ5年毎に開催している。前回の45周年同期会(2010年10月)の際に、次回は5年目ではなく丁度ほぼ全員が「古希」となる年に特別に開催しようという事で、今

年の11月13日～15日に九州で第9回目の同期の会が行われた。出席者は、及川、小原、島崎、白井、関川、竹井、野村、平塚、緑川及び八木の10名であった。行程は、

13日；熊本空港に10時集合し、マイクロバスで阿蘇山、高森・田楽の里、清和邑（文楽）、通潤橋・・・通潤山荘泊

14日：通潤山荘発、高千穂峡、やまなみハイウェイ、九重、由布院・・・ホテル山水館

15日：湯布院散策、解散 である。

12日は熊本で前夜祭を4人の前泊組で地元の刺身などで祝杯を挙げ、ライトアップの熊本城を見あげ、大いに盛り上がりました。

13日は予定通り熊本空港を天草のマイクロバスで出発、阿蘇に向かいましたが、天気がだんだん悪くなって「草千里」を出た時は10メートル先が見えないほどでした。しかし、天気は晴れたり、曇ったり、雨、曇、雷もなるなど大変変化に富んだものでした。高森・田楽の里では囲炉裏を囲んだ郷土料理と竹徳利のお酒を堪能し、話に盛り上がりました（写真、田楽の里）。その後、清和文楽館で「壺坂霊験記」山の段のさわりを見、聞き、日本の伝統文化について改めて認識を深めました。夕食の時は昔のワングルの「ごんすけ」13号を竹井が持ってきていてその話や、昔の部活の話で夜の更けるのも忘れて大いに盛り上がりました。

14日は観光地にはなっていないが隠れた皇室の参拝神社である幣立神宮、通称「高天原・日の宮」を参拝した。ここは、高天原神話の発祥の地と言われているところである。その後、高千穂神宮を参拝し、やまなみハイウェイに向かったが、途中で今年の夏の豪雨被害の生々しい山肌が削られた様子は自然災害の恐ろしさを目の当たりにし、唖然とするばかりであった。やまなみハイウェイでは雨が雪になりあっという間に冬になってしまいました（写真、牧ノ戸での雪の中で）湯布院につく頃には天気は回復し紅葉が夕日にきれいでした。

15日は湯布院の町を散策し（金鱗湖畔の露天風呂に入った仲間もいた）、楽しい時間を過ごし、次回は50周年記念同期会を平成27年に仙台近辺で行う事を約束し、元気な姿で会えるように誓い合って九州に別れを告げた。（文責、野村）



2012年ワングル43年卒同期会

7期（昭和43年卒）真尾 征雄

昨年7月酒田での同期会をやった時に、「次回は大地震の被災地を訪問したい。在仙の皆さん、お願いします」と決まってしまった。打合せを口実に手戸さん、国岡さんと数回飲み会を開き、おおよその計画を固めたが不安なことがあった。それはこの被災地を巡るプランに対して、同期の仲間がどう思うかであった。

9月8日（土）一ノ関駅に同期の仲間と大釜夫人、総勢16人が集まった。車3台に分乗して気仙沼に向かう。ホテルに荷を置いてから津波で被災した魚市場に行く。ここでガイドから当時の様子を聞く。津波の大きさに驚くと共に地盤沈下が復興遅れの原因になっていることを知る。夕食はできる限り地元で金を使ってもらうため3つのグループに分かれて、仮設の復興屋台村に行く。土曜なので混んでいると思ったが、人は余り出ていなかった。店には様々な人たちの色紙や応援ペナントが張り出

されていたが、地元の人達は仮設住宅に入っており近くには人が生活していないので、寂しさが漂っていた。被災した若い店主の話を聞きながら食事をした。

9月9日(日) 早めにホテルを出て陸前高田に向かう。途中、よくテレビで放映されていた「大きな漁船」が見えた。「あんなに大きな船がここまで流されてくるなんて」と思う。7万本の松が茂っていた高田松原に、あの「奇跡の一本松」が本当に一本だけポツンと立っていた。被災した地元の人達はどんなにかこの松に励まされたことだろう。9月12日に切り倒された後、復元されるとのことであるが、その前に見ることができて良かった。一本松をバックに記念撮影をする。

南三陸町ではあの「防災対策庁舎」で、北上川河口近くではあの「大川小学校」で頭を垂れる。どちらも言葉を発するのをためらう様な衝撃が伝わってくる。この悲惨な事故を後世に伝え、二度と同じ過ちを繰り返さないために、何か大震災の遺構を残してほしいと思う。

女川で9期生の藤中郁生君と落ち合う。卒業以来初めて会う人が多く、初めは戸惑っていたが、話すとすぐに思い出し打ち解けた。彼自身が被災し、すべてを流されてしまったのに、「女川 桜守りの会」を立ち上げ、町のために活動していることを知り頼もしく思い、応援したいと多くの人が思ったようだ。

彼の案内で女川の被災の様子を知る。旧女川町立病院の柱に残された「津波到達高さ」の表示に、一同仰天する。女川の町は津波の直撃を受けたため、鉄筋コンクリート造の建物が横倒しになり、木造建築は土台だけ残し何もなかった。想像するだけでも怖くなる。

石巻では、災害廃棄物処理業務を請け負っている鹿島JVを訪問し、大学の後輩の説明を聞く。廃棄物の膨大な量に驚き、丁寧な分別処理に驚く。処理の受入れをしてくれる市町村が増えないことが残念である。

松島大観荘には8期の宮下さん(旧姓中里さん)が出迎えてくれた。この夜が本番の同期会。全員が近況報告。皆さん病気と付き合いながらも、歳相応に元気なようだ。今回の同期会については、「被災地を直接見聞することができ大変良かった」と言う声が多く、幹事としてひと安心。「来年は村山貞一幹事長による佐渡で会おう」と決め、お開きとなった。



8期9期合同山行 第13弾(裏磐梯) 9月2日3日

8期(昭和44年卒) 相原 敬

平成10年に8期と9期合同の卒業30周年同期会を安達太良で開催して以来、同期会も13回目を迎えた。昨年は震災の衝撃から見送られたが、長年に亘って続いているのは、この学年の素晴らしい団結力と見ることも出来るが、一番の理由は面倒見の良い幹事様のご苦勞によるところが大きい。

参加者：ケンチョ、富川夫妻、片野、原田、川田 / 幸英、前田夫妻、根岸夫妻、相原夫妻



今年の集中地は、現役時代には考えも及ばない裏磐梯の五色沼。参加者はOB10人とその連れ合い4人の総勢14人であった。JR磐梯熱海駅に電車組、車組が集結して五色沼に向かった。五色沼の入口に手頃な空き地があり、ベンチに陣取ってコンビニのランチと再会の喜びを噛み締めたのだった。

今日の予定は特にないので、五色沼の散策に出ることにする。ケンチョ夫妻はボート漕ぎに熱中しているうちに、雨に降られた。私は体調の優れない富川と茶店で世間話に興じた。何処まで足を伸ばしたか定かではない五色沼散策組が戻るのを待って、ホテル入り。ホテルは五色沼真ん前の裏磐梯ロイヤルホテルだったので、這ってでも行ける距離だった。

宴会場は他の宿泊客と同席のため、晚餐は比較的静かに粛々と進み、酒量も勢いがなく食事中心。昔の宴会は食わずに飲んでばかりだったが、歳を重ねるということはこういうことなのか・・・食後は部屋に戻って、昔話のあることないこと。酒の勢いは幾分盛り返しつつあったが、睡魔に襲われる。

一夜明けて年寄りには朝が早い。しかも元気だ。朝食バイキングで腹を満たし、前田夫妻は磐梯山に登る勢いだ。ホテルでお別れとなる幸英を囲んで集合写真を撮り、仲良をモットーとする8・9期なので、皆で行動可能な場所を相談した結果、銅沼までということに決まった。スキー場まで車で駆け上がり、磐梯山の爆裂火口を正面に見ながらゲレンデを登った。バッタの大群やヤナギランの群生がみんなを喜ばせる。



程なくして銅沼に到着。爆裂火口と赤茶色の沼の対比が印象的で、しばしランチタイム。原田が作ってくれるカップラーメンと女性陣が剥いた梨を頬張りながら会話を楽しんだ。酒好きの川田もお茶けで我慢しているのがちょっと可哀想だったが、まだ10時だ。

登る時よりは足並みをそろえて同じルートを下ったが、眼下に広がる桧原湖や湖沼群が綺麗だった。下山後は何処かで食事という計画だったのだが、銅沼のカップラーメンで腹の空き間がなくなってしまう、潔く解散することにした。じゃまた来年会おう。

マチュピチュ探検隊＜ワングル卒業40年プラス1年記念＞

10期（昭和46年卒）黒田 和雄

メンバー：第10期 菅原・杉森夫妻・高野夫妻・若佐・黒田 計7人

期間：2012年7月27日（金）～8月5日（日）

我々10期のメンバーはワングル卒業後10年毎に記念旅行を続けています。10年目は 大学3年次の夏合宿集中地である雲の平集合、20年目は 思い出の二口温泉一泊と車で笹谷峠越え、30年目は シルクロードの旅（敦煌からカシュガルまで）。40年目は 世界遺産マチュピチュに決め2011年夏に計画したが、3月に東日本大震災があり急遽取りやめ。今年もう一度相談したところ二人の奥様の参加もあり、総勢7名のチームを組むことが出来ました。

片道20時間を超える長旅や高山病の心配など、還暦を過ぎた我がメンバーにはなかなかハードでしたが、怪我もなく楽しい旅となりました。大峡谷の中に浮かぶ天空の都市マチュピチュ、霧の中のインカ道、色とりどりのペルーの花、標高3800メートルにあるチチカカ湖と人なつっこいアマンタニ島の人々など。映像だけでは得られない、自分の足で歩いたからこそそのアンデスを経験出来ました。

「日頃、なんと無駄な物を身につけているのか！」との発想で、荷物遅延トラブルも笑い飛ばしてしまうプラス思考は 今回も健在。気心の知れたワングル仲間との旅はやはり代え難いものでした。我々同期は卒業時に16人でしたが、残念ながら2010年に藤田君を亡くしています。マチュピチュを最も強く望んでいたのが藤田君でしたが、彼の遺影を中心にマチュピチュで記念の写真も撮ることが出来、本人も喜んでくれていると思います。



標高 4335m ララヤ峠

マチュピチュで藤田君とともに

「今回は各自何か個人テーマを持って旅しよう・・・」との提案があり、それぞれが好きな課題をまとめたレポートもできあがりました。アンデスの人々・花・雲・野鳥などの写真特集。インカの歴史に結びつけたジャガイモの研究報告、アンデスの感動を詠んだ漢詩集、ガイドさんが毎日実測してくれた全員の血中酸素と脈拍のデータをもとにした「高所体調管理報告」など。



民族衣装を着て これから踊りに行く（アマンタニ島）

現在、日々の記録と各人のテーマを織り込んだアルバムを作成中。アルバム作りでも旅の余韻を味

わっています。今回はまだまだ現役の方が多く、結果メンバーは7人となりましたが、次回はより多くの方と一緒に楽しめたらいいと思います。

20期、22期クワンナイ川遡行

22期（昭和58年卒）石川 勤

この数年20期～22期のメンバーで毎夏沢登りをしていましたが、今年は残念ながら仕事の都合などで21期から誰も参加できず、20期1名（岩屋）、22期3名（土屋、手塚、石川）で大雪山のクワンナイ川を遡行することとなりました。

クワンナイ川は、滝ノ瀬十三丁というナメが有名でかねてから一度は行きたいと思っていましたが、沢が長く一旦雨が降ると増水がすごいとのことで、2年前に恋ノ岐で鉄砲水にあってから敬遠していました。しかしながら全員50歳を過ぎ、今のうちに行っておかないと行けなくなってしまうという思いで今年行くことにしたのです。

8月3日各自飛行機にて北海道に移動、旭川に集合後レンタカーを借りて天人峡に移動。この日は移動のみで出会いにかかる橋の脇の駐車場にてテント泊。

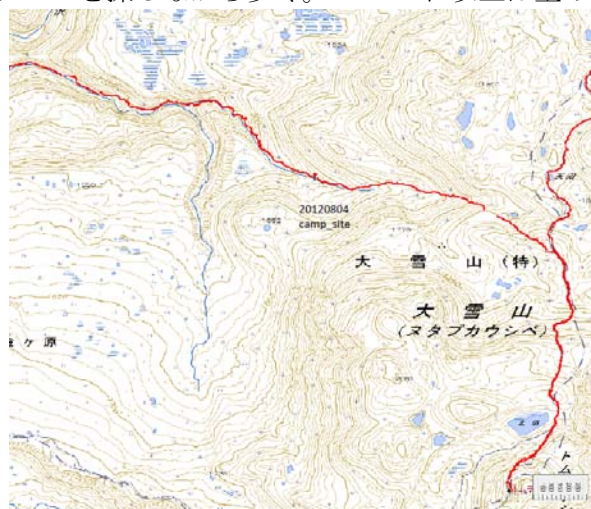
8月4日は幸いにも天候に恵まれ4:44分出発。ポンクワンナイ川出会いまでは道の跡をたどり、5:00入渓。渡渉を繰り返しつつ単調なゴーロ歩きが続く。川幅は広く大量の流木がかなり高いところにもあり、増水のすごさを感じる。9:30カウン沢出会い。出発から5時間近くかかっているが、これでもあまり休まず歩いた結果である。10:00に滝ノ瀬十三丁に入る。

ナメは延々と続き、長かったゴーロ歩きの辛さが一気に吹っ飛ぶ快適さだ。昨年までなら沢の冷たい水を使って昼食に素麺を作る慣例であるが、今年は軽量化のため、食料も思い切り軽くしたため味わえないのが残念。

ハングの滝は左から巻く。ぶら下がっているロープを頼りに登るが少しいやらしい。13:15上二俣に到着。だんだん源流の様相を見せる中テンバを探しながら歩く。15:00これ以上は望めないと思える良い場所を見つけ行動終了。このころから天気が悪くなりポツポツ雨が降り始めた。

翌8月5日は前日夕方からの雨が続きしかもガスがかかり視界が悪い。朝5時過ぎに出発。最後に雪渓があり稜線に7:00ごろ到着したが道が不明瞭。ガスで何も見えないが岩屋を除く3名はトムラウシ岳ピストンに出かける。ひとり待つことにした岩屋はテントを張り昼寝をしながら待機。

雨風が強くなりトムラウシ岳までのピストンは寒さを感じた。数年前夏に北沼あたりで大量遭難が発生しているが、とても理解できる。途中ほとんど人には会わなかった。10:00に岩屋が待つテントに戻り、天人峡へ下山を開始。歩き始めた直後に土



屋が足を滑らせて転び顔を岩に強打した。ヘルメットを被っていたので大事にはいかなかったが、たくさん血が出て動揺する。その後全員下山するまでヘルメットの着用を続けた。

稜線上はずっと風雨が強い状態が続き、とにかく早く下山したい。化雲岳を過ぎてからの下山道は広い笹藪の中を道が通っているが、道の部分がえぐられているため水が流れ沢を下っているような感じ。最初は浅かった水が、下山とともに深くなり、場所によってはひざ上まで泥水の中を歩かねばならない。足元がまったく見えないためペースが上がらない。2時間ぐらいこの状態で歩いたが、道を流れていた水が滝となって消えていったのでホッとした。長い下りの最後に羽衣の滝が見えた。高さ水量ともに申し分なく立派である。

天人峡に下山できたのは17時近くとなり、合羽の中もびちょびちょでテントに泊まるのは避けたい気分だ。1軒の宿が夕食は出せないが宿泊可とのことで転がり込む。着ていたものをボイラー室に全部干して、風呂にはいり夕食。ビールをゴボゴボ飲めて満足。ただし、夕食がお湯入れるだけの軽量ESSENなのが味気ない。

8月6日朝よりレンタカーで帰る。額に怪我をした土屋を病院に連れて行き、治療が終わるまでの時間を使って人気の旭山動物園に行ってみた。前日とは違いよい天気で、動物園は観光バスもたくさん来ていてすごい人出。旭川から千歳空港までの電車で酒飲んで反省会代わりとした。今回一部メンバーが導入した携帯のGPSアプリやGPS機能付きデジカメで、どこを歩いたか分かるということで、右上の地図はその出力結果である。プレで間違った沢を登り、登り切る直前まで間違えに気づかなかったという人には言えない経験をした我々にはとても便利？なものだ。

今年は屋久島でした

26期（昭和62年卒）長谷川 謙司

我が26期（1987年卒）は卒業4年後以来ほぼ毎年山に行っていたが、歳月には勝てず山が低くなりロープウェイが好きになり、一昨年はついに筑波山(877m)に登るに至った。そして昨年は永年幹事の入院もあり同期山行不催の年となった。

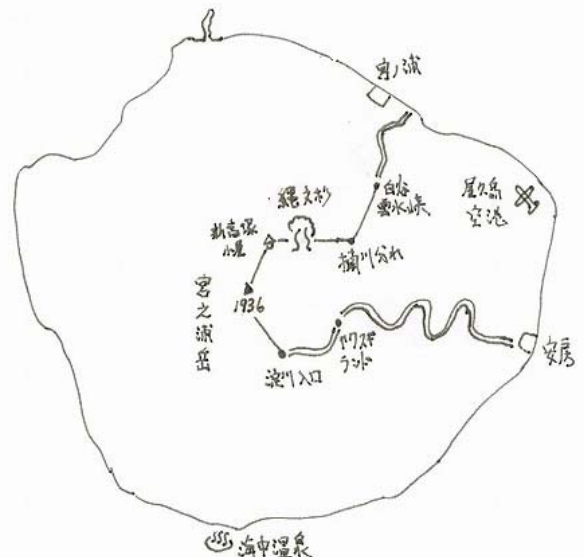
「今年こそ、どう、屋久島って」「毎年その意見出るけどね」、地方勤務者（平田とか）の上京の折に次回の山行の話になるのだが、今年はいつになく強硬派の意見が通った。一昨年の筑波山は6人参加（同期11人）であったが、催行が先鋭化したためか屋久島行は4人となった。うち2人（北村・森）は1日先に来てダイビングを楽しむという。永年幹事の伊田は山行後にダイビングをすると言うので、著者は近隣を観光して帰ることとした。今回はいつになく自由度が高い。

2012. 07. 14(土)：0547淀川入口ー0627淀川小屋0637ー0727展望台0737ー0809花之近河0805ー(10分休憩)ー1006栗生岳1032ー1047永田岳1100ー1120焼野三叉路1325ー1342新高塚小屋（泊）

2012. 07. 15(日)：新高塚小屋0507ー(5分休憩)ー0605高塚小屋0610ー0620縄文杉0635ー0719ウイルソン株0748ー0748トロッコ道0753ー0825近道分岐0838ー0855楠川分れ0856ー0935辻の岩屋ー0945太鼓岩分岐0945ー太鼓岩ー1005太鼓岩分岐戻るー1111白谷雲水峡バス亭

気づいた事を少し記す。

- 屋久島は女の人の観光客がとても多い。3-4人で、2人で、または1人で来ている。このことは種子島や鹿児島市内などでは見られない現象であった。
- 登山道は整備されている。木製の堅牢な階段が随所に設置され、足首を捻りそうな箇所は少ない。
- 「荒川ロー縄文杉」の往復間にはとても人が多い。これを外れると、道は混雑していない。



7/15(日)は11時に山を下り、バスに乗って1時頃には民宿に着いた。元気な3人は近くの海岸に行ってシュノーケリングをしようと言う。地元の人しか利用しない海水浴場にもシャワー設備や日よけのベンチが整い、島の豊かさが窺える。空は快晴で、今日の朝に深い山奥にいたことが信じられない。それでも今日も山には黒い雲がかかっていた。



第4回45期同期山行【2012年10月20日 安達太良山】

45期(平成18年卒)平田 弘一郎

メンバー：45期 雨宮、草野、佐藤、多田、長井、平田 他1名

○はじめに

第4回を迎えた45期同期山行。最初に私事ながら、9月29日に式を挙げ、2人暮らしを始めました。1人暮らしに慣れ過ぎて色々と不安でしたが、仕事を終えて帰った家に明かりが灯っているのは、中々良いものですね。お祝い下さった皆様、この場を借りて改めてありがとうございました。

話を戻し、式で全員集合して時期が時期だけに、今年は同期山行がないものと思いついていたが、声が上がったので集まった第4回。同期7人の現住所のおおよそ重心を取って、福島は安達太良山へ。浜本だけが奥さんの体調不良により残念ながら不参加。

○安達太良登山

紅葉がちょうど見頃なこの時期。晴天の土曜朝に安達太良高原ロープウェイ乗り場に集合。晴天&紅葉&ロープウェイの3点セット。そうです。企画段階では想定していなかった大量の人と車。ややげんなりしつつも、有料ロープウェイなど使うわけもなく、スキー場をゆくりと登る。体調不良の賢一が遅れ気味、減量に成功した多田が快調と、例年とは皆のペースが違い、妙な気分・・・。駐車場であれ程いた人が全くおらず、山を基調にした近況報告をしつつのんびりとスキー場を登りきると、当然のように行列に遭遇。再びげんなりしつつ、行列のゆっくりペースで登る。山頂の岩ポコンは槍ピーク縮小版か？と思える行列に並びピークハント。昼食を取り、風に吹かれて下山開始。途中、偶然出会った長井の友人に写真を撮ってもらおうが、そこで「山頂はどっち？あ、ロープウェイがあるの？」という言葉が聞こえてきて、改めて観光地感を感じる。誰かさんの「この程度の山には登山靴もカップもいらないぜ！」な心意気も、あながち間違っていない気がする。その後は人混みの中をゆる～りゆくりと、ほぼコースタイム通りに無事下山。一路、温泉&コテージへ。値段以上の感がある綺麗なコテージで夜更けまで語りつくして、今年も同期山行無事終了。自分も一票入っていて何だが、もっと山らしい山に登りたかったなあ。

○おわりに

東日本に同期が散っているため、郡山在住だと毎年重心付近になって申し訳ない気持ちを持



ちつつ、北は秋田、南は小田原からはるばる集まってきてくれたので、今年も無事実施できました。交通の便を考えての安達太良選定だったが、観光地化した人の多さは考えていなかったのも、この点が今回最大の反省です。ゆるゆるルートを選んでしまったため、山行記録に記すことが少なく難儀したので、今回はこれを生かして。

来年には雨宮が今年6月に生まれた息子連れて参加してくれる事をほのめかしていたので、是非来年もやれたら良いと思います。来年3月予定の浜本babyはどうだろう？いずれにしても来年こそは全員参加を目指して！！

遙かなる大雪、石狩連峰

3期（昭和39年卒）後藤 龍男

パソコン机を整理していたら、古い写真が入ったCDを見つけました。中身を見ると、52年前の昭和35年、大学1年生の時のワングル夏合宿の写真です。なぜこんなものが机の隅にあったのか、いくら考えても思い出せないのですが、あまりに懐かしいので、合宿に参加した当時同じ1年生だった小俣君に添付で送りました。彼も懐かしかったらしく、その時の思い出を伝蔵荘日誌に書いてくれました。当時の仙台の様子、ワングル初期の様子、北海道大雪山周辺の様子が分かってなかなか面白いので紹介させて下さい。

伝蔵荘日誌URL：<http://www5f.biglobe.ne.jp/~denzasou/m-mid-left/5-diary/121115tg.html>

これを読むと、当時のワングルはほとんどが平地の活動で、山へ行くことは少なかったことが分かります。昭和35年の夏合宿は大半を占める平地派と、一握りの少数派である山派に別れ、平地派は三陸海岸を歩き、山派は大雪山、石狩岳、十勝岳の大縦走を行っています。

当時の大雪山は旭岳を過ぎるとほぼ人跡未踏地域であり、仙台駅は木造の粗末な駅舎であったことが分かります。ワングルの装備も貧弱で、20日間の山行に使う食料調達に苦労したことも書かれています。戦後15年、日本はまだまだ貧乏だったのですね。

52年前の仙台や発足当時のTUWVの様子を振り返るに最適な記録でしょう。



五色岳から旭岳、忠別岳



石狩岳頂上

大雪・石狩連峰合宿を偲ぶ

3期（昭和39年卒）小俣 勝男

ワングル一年時の夏合宿の写真を、後藤君が送ってくれた。北海道の大雪山・石狩連峰を歩いた時の物だ。後藤君からの写真を見て、合宿時の事が連鎖反応的に思い出された。

昭和35年に入学した時、ワングルは未だ川内の同好会で、学部進学者はOB扱いだった。会の活

動方針もはっきりせず、「自然に親しむ」をメインテーマに、各グループで勝手に野山を歩いている感じだった。この年の合宿を如何するかで、先輩たちの意見が分かれた。多数派だった平地派は杉田さんをリーダーに三陸海岸、山派は多田さんがリーダーで、北海道中部山岳地帯と決まった。山派の参加者は池田、渡辺、江端、大内、梅垣の諸先輩と一年生の後藤、小俣の計8人のみだった。硬派の山派だった故遠山君は、何故か三陸を歩いた。

鈍行夜行列車と青函連絡船を乗り継ぎ、層雲峡から入山した。旭岳を盟主とする大雪山系は、当時でも開けていて登山者も多かった。しかし、中別岳以南は登山者は見掛ける事も少なく、秘境沼ノ原湿原にテントを張り、石狩岳を往復した時は、誰にも会うことはなかった。快晴の石狩岳山頂は遮るものなく、知床の羅臼岳、十勝・日高連峰が一望のもとに展開していた。生涯でこれ以上の眺望に巡り合ったことは無い。後藤君からの写真に、快晴の石狩岳山頂からの景観に、全員が見とれる一枚がある。

自分が蕁麻疹に罹患し、治療と補給を兼ねて天人峡温泉に下山、宿泊した。仙台から天人峡にデポしていた食品は、かなりの物が腐っていた。トムラウシ直下の無人小屋に宿泊時、寒さ避けにシュラフに掛けていたテントが燃えた事がある。渡辺さんが奇声をあげて飛び起きた。発見が早かったので大事には至らなかった。悪天候が続いたり、食糧不足やらで、計画した十勝岳は諦め、20日間の合宿は終わった。最南到達地はトムラウシ山だった。ガスに煙るトムラウシ山頂の集合写真は、全員疲労が色濃く出ている。

エッセン係は後藤君と二人で担当した。「軽く、安く、腐らず」を念頭に、食品は仙台駅近くの日の出市場で調達した。当時、安かったクジラ肉を塊で買い、スライスにして味噌漬けと塩漬けの二種類を作った。当時、ゲーキと呼んだ鯨肉一枚で飯盒飯が食べられた。缶詰は一缶35円のサンマのかば焼きのみ。当時、青葉通りのラーメンが一杯60円の時代だから、高級品扱いだ。

平均50キロを超すザックを担ぎ、粗末な食事、あれだけのアルバイトによく耐えたものだ。最期の幕営地で長雨にたたられ、テント周囲の排水溝の能力が追い付かず、水につかったシュラフで一晩を過ごした。背中の下を水が流れた。低体温症にもならず、皆元気だった。若いと言うことは素晴らしいことで、70歳を過ぎた今、望むべくもない。

卒業直前に漏電から瀬峰寮が焼失した。自分の誕生日に、山道具、写真、記録を含む一切を失ったのは、天の配剤の様に思えた。就職先の環境もあって、それ以来、山らしい山に登っていない。後藤君からの写真は、忘れかけた記憶を蘇らせてくれた。もう二度と登ることのない、大雪・石狩連峰は遥かなる山々になってしまった。自分にとって、大雪・石狩連峰山行がワンゲル活動の原点になっている。学生生活の真の起点となったのが、これ等の山々で仲間達と過ごした経験であることに間違いない。

後藤君の写真からは、合宿のみならず、お世話になった下宿の家族の皆さんや瀬峰寮のおばさん等、自分の生活を支えてくれた、今は亡き人達との交誼が思い出され、心が熱くなった。ワンゲルでは、今に続く沢山の仲間達に恵まれた。多感な若き時代に、素晴らしい山々と、多くの人達と出会えたことは、自分にとっての大きな財産であると思っている。

(編集者注：後藤さんの記事を読んで、伝蔵荘日誌を読んでみた。昔のワンゲルが偲ばれる記事なので、会報用に短くしていただいた。伝蔵荘日誌も是非ご一読下さい)

赤岳日帰り山行

4期(昭和40年卒) 大東磐司こと小原佑一

八ヶ岳山麓の「秘密基地」と称している小さな畑での農作業の真似事も二日続いた好天のおかげではかどり、昨日はちょうど良いタイミングで雨が降り、休息の日を過ごした。今日は天気が好転しそうなので急遽、山道具を車に積み込んで出発。美濃戸に着いたのが5時半頃。1日分の駐車料金を払い、雪の状態を聞く、「林間はまだ雪が残っている。アイゼンはあるなら持って行った方が好い」とのこと。

南沢沿いにゆっくり登っていく。途中、砂防ダム工事のため道は高巻き、「ヘリコプター注意！」の警告標識が貼ってある。最近はやっとした工事でもヘリを使うらしい。そのうち雪が出てくる。

人が歩いた跡が周囲より高く、凍っている。まるで木道のように続く。踏み外すと脇はズボッと沈んで歩きづらい。

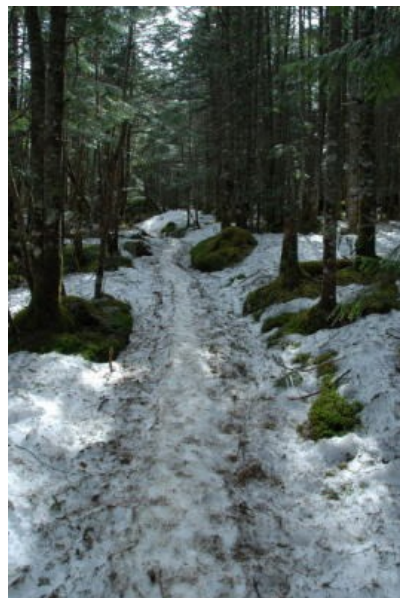
小屋の物資運搬に使っているヘリポートを過ぎると行者小屋。ここから見上げる赤岳はまだ高い。行者小屋から林間の雪は昼間の気温で表面の方が融け、夜半に凍ったようで足元が不安定で歩きづらい。地蔵尾根ルートの傾斜はそれほどでもないが、アイゼンをつけることにする。ピッチが上がる。樹林帯を抜けると傾斜もきつくなってくる。稜線も近くなると雪は消えた。

稜線上にはほとんど雪が残っていない、ただ浮石が多い。山頂小屋の人がルート上の浮石を脇の安定したところに移動していた。

3,000mに100m足りない赤岳山頂からの展望はすばらしい！

北に三日月君のいる蓼科山が見える。南には富士山も小さく見えたが、すぐに雲の彼方に消えてしまった。山頂の岩陰でゆっくり休んでから文三郎尾根を下る。雪は少ないが階段が多い。途中振り返ると、きれいな彩雲が一筋。なんとも言えず見とれてしまった。

行者小屋から赤岳鉱泉經由北沢のルートで帰る。後半のダラダラした自動車道路では冬用の重い山靴は堪えた。最近もっぱら履いている無雪期の軽登山靴の倍以上の重さ。車に戻って靴を脱いだ時の開放感はたまらなかった。



残念記

4期（昭和40年卒）島崎 質

昨年、当面の目標であった「アルプス4000m峰20峰」を達成できたが、次の目標の設定がなかなか難しい。とりあえず70歳の記念に、残っている大物、モンブランに登るのもいいかなと思い立った。

25年続けているヨーロッパ旅行、家内がウィーンやザルツブルグに行きたいと言うので、ついでに登れる山はないかと探し始めた。ヨーロッパアルプスの東端であるチロルには4000m峰こそ無いが氷河に囲まれた岩山がたくさんある。

調べた結果、オーストリアの最高峰であるグロスグロックナー（3798m）が最もポピュラーであることが分かった。ネットでガイドビューローを捜し、コレクティブに申し込んだ。富士山より22m高いたけだが氷河の中に屹立する立派なピークである。一般ルートはアイゼン、ヘルメット着用だがピッケルは不要。最終の山小屋から2時間弱である。7月9日、若いガイドに導かれて二人のドイツ語圏スイス人とともに登った。

さて、モンブラン（4810m）。ガイドや日取りがなかなか決まらずやきもきしたが7月22日シャモニーに入り、24日出発した。ロープウェイと登山電車を乗り継いで標高2000m地点から歩き始める。かつてはあと300m上まで電車があったのだが土砂崩れで不通のままになっている。

グーテ小屋（3800m）まで高差1800m登らなければならない。一応スイスで高差1600の日帰り往復はやってきたのだが甘かった。3200mまではハイキングルートで楽だがあとがきつかった。ルートは岩主体となりペースが落ちる。若いガイド（ジュリアン32歳）に何度も諦めてはどうかと問われたが受け入れるわけにはいかない。標準より1時間プラスぐらいでヘロヘロになりながらもグーテ小屋についた。1時間ほど休んだのち夕食。スープはなんとか飲み込んだが固形物は全くのどに行かず、初めて味わう疲労困憊であった。小屋では飲酒禁止というのも効いたかもしれない。

翌朝2時起床。作っておいたアルファ米のおこわは喉を通らず、かろうじてバナナを1本押し込んだだけ。2時半、ガスの中を歩き始めたが歩は進まず。後発パーティーにどんどん追い抜かれていく。黙々と3時間ぐらい登っただろうか、緩やかなピーク、ドーム・ド・グーテ（4300m）に着いてジュリアンが「ここまでにしよう」と言う。とても抵抗できる状態ではない。あっさり踵を返した。下りは普通に歩けたけれど、登山電車の駅では登頂に成功した連中と一緒にになった。

体力が衰えたのだから仕方がない。悔いはない。山登りは続けたいけれどハードな山はもう終わりだなと意外にさばさばした気分だった。だが待てよ、1日か2日追加して1日の行動を減らせれば行けるかもしれない。モンブランにはその可能性がある。今はそう思っている。



グロスグロックナー



ギアナ高地トレッキング

5期（昭和41年卒）八木 眞介

昨年の11月下旬からギアナ高地のトレッキングに出かけた。ギアナ高地は子供の頃から行きたいと思っていた場所の一つで、その長年の夢がかなった。

今回のトレッキングは、前半は、ベネズエラの首都カラカスから国内線・チャーター機・専用車と乗り継いでロライマ山登山の入口であるパライテプイに入り、そこからヘリコプターで早朝ロライマ山の頂上台地に飛び、そこに2日間滞在して頂上台地上をハイキングした後、3日間歩いてパライテプイに戻った。後半は、チャーター機でのエンゼルフォールの展望フライトと、カナイマからアウヤンテプイの北麓を流れるカラオ川と支流のチュルン川をボートで遡っての、エンゼルフォールを間近に望む展望台へのハイキングである。

ロライマ山はギアナ高地の東部に位置するテプイ（テーブルマウンテン）の一つで、比較的平坦な頂上台地を持つ。頂上台地上は、岩の露出した所が大部分で、奇岩が随所にあり、樹木はほとんどなく、窪地を中心に草類がまばらに生えているという、荒涼とした異



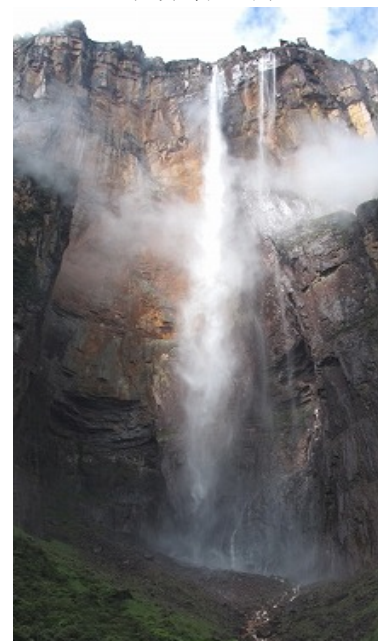
テーブルマウンテン・クケナンとロライマ山

次元の世界を感じさせる景観である。池や水晶が一面に露出した水晶の谷と呼ばれる場所もある。花は、数種類の蘭の他、食虫植物や奇妙な形の草花が生え、いずれも固有種である。ここにしかない真っ黒な蛙もおもしろい。

エンゼルフォールは、ギアナ高地の西部にあるアウヤンテプイの奥深くにある世界最大落差を持つ滝として有名である。飛行機での展望フライトは幸い天気も良く、滝をよく見られたが、あっという間であった。飛行機から見るアウヤンテプイの頂上台地は樹木が生い茂るロライマ山とは全く違う景観のようである。

エンゼルフォールの展望台近くへのボートクルーズは、太い丸太をくりぬいたボートで川を約70km位遡るが、下流部は広くゆったりとしており、上流部は急流や岩の多い迫力のあるクルーズである。展望台近くでのキャンプは蚊帳付きのハンモックで、初めてのハンモック体験であった。展望台では、着いた時は滝の下部のごく一部しか見えず、待つこと1時間半で滝の全貌が姿を現した。それは思っていたよりもはるかに高い所に落ち口があり、その高さは「すごい」の一言であった。滝への往復のクルーズでは、川の左岸に延々と続くアウヤンテプイの壁が見られるが、その規模の大きさは荘厳ささえ感じられるものであった。

今回のトレッキングは、乾季であるのに午後は雷雨というような天気が続いたが、これまでと別の世界に入ったような素晴らしい体験であった。



エンゼルフォール

カナダ・エスプラナーデ トレッキング

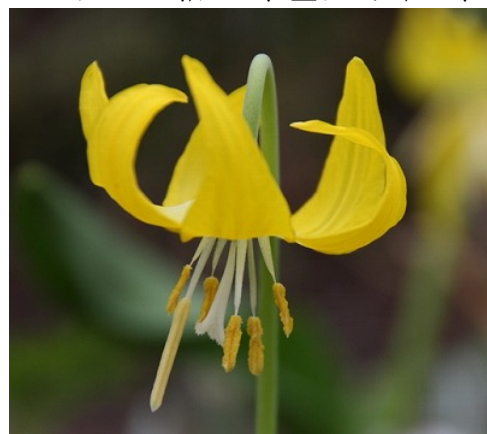
5期（昭和41年卒）八木 真介

7月15日から23日、カナダのエスプラナーデに出かけた。エスプラナーデはカナディアン・ロッキーの西にあるコロンビア山脈の中にある山域である。カナダのトレッキングは今回が初めてで、期待を持って出かけた。

エスプラナーデには徒歩で入ることは出来ず、山腹の山小屋にヘリで入山して、稜線やピークを歩き、またヘリで下山するという形になっている。山に入っていたのは、入山・下山日を含めて5日間である。カルガリーでカナダの地を踏み、レイクルイズに泊して、翌日に入山し、山脈の中腹



一泊目の山小屋とワカビピーク



グレイシャーリリー

にある3つの山小屋を巡っ

て稜線を歩くというツアーである。山小屋は15人程度が泊まれる無人の小さな小屋で、現地ガイドとコック（食事を作ってくれる女性）が我々と一緒に入山して一緒に移動し、一緒に下山するというシステムになっている。同時に入山できるのは1又は2パーティーで、一つの山域を独占できる。

山小屋はちょうど森林限界近くにあり、お花畑にヘリで下り、お花畑から飛び立つといった感じである。コースは、小屋の標高が2100m～2200m、稜線が2300m前後、登ったピークが2400m～2600m強といった具合で、大きな高低差はない。

稜線及び山腹は、雪のない所はほとんどが傾斜の比較的ゆるいお花畑になっている。

人が歩いたトレースは一応あるが、好き勝手に歩くことができる、今年は雪解けが遅れていたとのことで、咲いている花の種類がやや少なく、色どりも物足りなかったが、まさにお花畑を散歩するという気分を味わった。

今年は特に多かったようだが、いたる所に残雪があり、その雪上を歩くのも気分が良かった。斜面を立ったままで滑ってみたり、学生時代の5・6月の東北の山歩きを思い出させるものであった。また、時間も十分にあったので、あちこちのお花畑で昼寝もしたが、これもすばらしかった。

カナダはロッキー山脈もコロンビア山脈もいたる所に氷河があり、白い山並みがどこまでも続いているという景観で、他とは趣の違ったスケールの大きさがある。山と山腹の針葉樹の森との組み合わせ、それにあちこちにある山上湖とが相まって、素晴らし景観を作っている。再びカナダに、特に今度はロッキーの方に行きたいと思っている。

金 峰 山 登 山

6期（昭和42年卒）加藤 邦明

2012年10月2日（火）の朝5時に鎌倉の自宅から自家用車で出発し、大弛峠には9時に到着した。駐車場は拡張工事の最中であつたが、舗装された山梨県側に20台、未舗装の長野県側に15台程度が駐車できそうであつた（正確には「林道巡回場所工事」で、平成24年7月3日～平成24年10月15日となっていた）。当日は、山梨県側に11台、長野県側に1台が駐車中であつた。手洗いを済ませて、バロメーター（高度計）を峠の標高2,360mに合わせて9時15分に出発した（晴れ）。

細尾根を辿り、小さなピークで一休み（9時50分）。朝日峠に下り、相前後して歩く若い男女4人組と挨拶しながら、岩がゴロゴロする岩峰に到着した（10時20分／2,530m／曇り・晴れ）。朝日岳を10時40分に通過し、足元ザクザクの瓦礫を下り、鉄山の巻道東側分岐11時10分（2,510m）、森林限界に近いガレ場を登って（11時40分／2,570m：曇り）、金峰山には11時55分に登頂した（大弛峠から10,141歩）。「車で行く山あるき」コースガイドより10分多い2時間40分であつた。

ガスがなかなか晴れないので五丈岩の写真もままならない。昼食後12時15分には下山とした。鉄山巻道東側分岐（13時00分／曇り）、足元には瓦礫が散乱する急な登坂で朝日岳に到着した（13時35分／霧）。先ほどの岩峰で周辺の峰々の写真を撮って、朝日峠に14時10分、駐車場には14時45分に戻った（往復20,123歩：バロメーターの標高は2,370mでほとんど同じ）。途中で花の写真を撮ったりして、コースガイドより20分だけ遅い2時間30分であつた。

着替えをして15時10分に出発し、フルーツラインから本日の宿泊地「ぶどうの丘」に移動した。



台湾の土木遺産を訪ねて

7期（昭和43年卒）真尾 征雄

昨年5月に7泊8日の台湾旅行を企画し、川仲間とその家族29人で訪問した。一番の目的は、戦前に日本の若い技術者「八田與一」が造った烏山頭ダム の視察と八田與一没後70周年墓前祭への参加であつた。

行ってみて驚いた。昭和5年に完成した、当時東洋一の烏山頭ダムは、現在も満々と水を蓄えて嘉南平原に水を供給していた。その工事の責任者についたのが八田與一、東大土木工学科卒の技術者で、

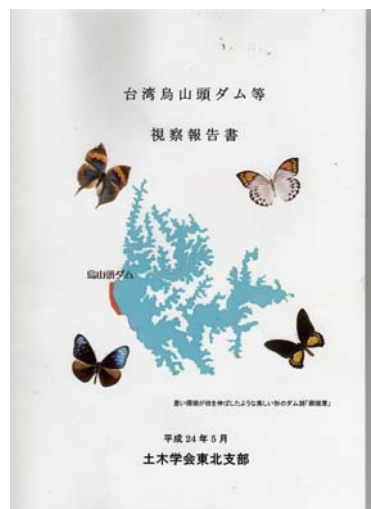
着任時は34歳の若さだった。その工事を日本では前例のないセミハイドロリックフィル工法を採用し、10年間で見事完成させた。文献で調べれば調べるほど、八田與一の技術者としての素晴らしさと共に、人間八田與一の魅力にも惹かれるものが多かった。

ダムサイトの一角に、八田與一の座像と八田夫妻のお墓があり、毎年5月8日の命日には墓前祭が欠かさずおこなわれている。今年の70周忌の参加者は、蕭万長副総統を始めとして、日台合わせて何と700人。台湾の方達が、不毛の地を大穀倉地帯に変えてくれた八田與一に今でも大きな感謝の念を注いでいることが良くわかった。公共工事不要論まで言われている我が国の昨今と比べて、この違いがどこからくるのか考えさせられた。

台湾では教科書にも載るほど有名な八田與一が、日本ではほとんど知られていないのが残念である。帰国後参加者が分担して執筆し「台湾烏山頭ダム等視察報告書」としてまとめた。少しでも八田與一のことを知ってもらえればとの思いから国立図書館、宮城県立図書館、仙台市立図書館に寄贈した。興味ある方は、是非ご覧ください。ワングル4期の平塚征英さん、同5期の瀬尾勝之さんも執筆しています。



八田與一墓前に献花・参拝する一行



ダム湖「珊瑚潭」と台湾の蝶を表紙に配した報告書

新年会欠席のボヤキと銀杏・・・

7期 金子清敏

半年前、知合いの釣り師より頂いた包丁5本のうち2本を、新潟の研ぎ師に最近研いでもらった。“ガマの油”の口上師が、1枚が2枚、2枚が4枚、4枚が8枚・・・と懷紙をスパッ、スパッと切っていくが如く、長ネギの上に研かれた小出刃を置くとその重みで白身のネギがスーッと綺麗に切れていく様は、武士の上段から引き落とす刀の切れ味を連想させるほど、プロの研ぎワザに今更ながら驚きました。

昨年9月に“急性憎悪の糖尿病”と診断されて以来、糖の摂取を低く抑えるためにと、酒は一切断ち、更に糖が多く含まれる白米・穀物類・果物一切・煮物・菓子類等は極力少なめに摂取し、甘飲料は一切口にしない事無く、キャベツ食に“精神誠意“努力しました。その結果、改善された生活習慣の賜物で、体重も7kgほど落ちて、血糖値も今では一般人以下の数値に落ち着いている。但し、油断すればすぐ元に戻ってしまうとのこと。

1年前までは、建造指導として収入外収入として頂いたもので、暖簾が下がっていればそれなりの店で、知らぬ隣人であっても杯を交わして一時を過ごし三昧していた習慣があったものの、今では執行猶予の身であれば、そのままスーッと暖簾を見過ごしていける状況になっております。

夏前より、再びいそしんできたゴルフも、同期との12月16日のプレーで年度納めと楽しみにしていたものの、女房の手術立合い日とかち合いチョン。その昔には、“ガン手術の立合いより、仕事を決める海外出張優先”と背中を送り出されたが、現役の終わった今では“当時の言葉”のかけらも

なし。グリーン上でカップをかすめたボールのうらめしさの味わいを知るのみ。

この数年、無償の活動としては、季節毎の“浦高OB会の100年の森づくり”励行、県立博物館の展示解説、博物館友の会の講演会・見学旅行企画等諸々の活動に携って毎日をただ忙しくして生活している。

年末に、従弟の結婚式がありました。“禁酒”している者に乾杯を依頼するなど憤懣やるかたなくも、折角の“近酒”の席を用意していただいたことにズラーっと並べられた輝くグラスに幾杯か味わった。スコッティの味がバーボンのそれに感じたのは、舌が忘れたためか仕方ないと思ったが、懐かしさがこみ上げてきた。

そろそろ70歳に近づいてきました。解説を受けるお客様よりは、喋る姿に表情が若いと言われるものの、先日鎌倉で撮った孫との七五三の時の写真顔を見ると、髪はうすく表情も陰鬱・・・知らずの内に確かに老けが寄ってきたなと思った。

酒のない、個人に合った調味料が効いてない老け人生は、こんなものかと思わざるを得ない。銀座の店からすでに1年以上足が遠のいている。中村勘三郎が1年前、喉の痛みで入院し、そのまま癌晴ることなく亡くなってしまった。

本物に触れたいと、最近では東大博物館で来館者への展示品説明に活動を始めた。東大構内には、日本人学生はもちろん中国、東南アジアからの留学生、教授、准教授、助教、特任教授、特任助教、研究員、事務職員、医師、病人そして高校生より一般までの来観者、講演会参加者、各種業者等が至る所で交雑し大学街を築いている。構内には14もの食堂があります。生協食堂で会話する学生達と一緒にになると、50年近く前を思い出されます。今年は、季節異変であろうか立派な太い銀杏並木には、銀杏の結実が悪いとか。昼休みには、サッカー場・合気道・弓道場には練習で熱気がこもる。広い生協で辞典を開く人はいても、今では三四郎池の辺りで読書する人、語る人はいない。それでも銀杏並木と安田講堂の周囲には、筆か鉛筆でスケッチする老人達が座っている。博物館には、近隣と修学旅行生が化石古生物と発掘人骨の見学に来る。何を思っただろう？ 東大の始業が9月になれば、合格から始業までの5ヶ月間、入学者は思いきったことが出来そう。これからの東大生は面白くなる。

現役を引退してからを残り人生1/3とすれば、番犬の如くただ食事してよそ者に対してきまみに吼えるだけというに等しい“リュックを背負った老人”の集団が、これからの都市地域にその人生を消化しようと加速的にはびこってくる・・・それはまさに病原菌をもった宇宙人の到来に似ている。

東北大で原子力を選考したものは、その学力はピンかキリであった。今思えば、北条真人はキリと思われていたが、実はピンであったからこそ一足早く放射能に染まる俗界から逃げたのであろう。人間の知恵では自然の原子力に対しては限界がある。彼は坊主の息子に生まれたことで、仏様からその人生は決まっていたのであろう。一緒に生活していた当時、ぶつぶつ言いながら食事していたことを思い出した。

—012, 12, 5記—

追記) 3月21日より、東京駅丸の内南口にある中央郵便局の改修されたその2～3階に

J Pタワー学術文化総合ミュージアム「インターメディアテク」(IMT)として開業され、東大博物館標本の一部(ミイラ、古生物化石等)が展示されます。(入場料: 無料)

氷と岩を楽しむ



妙義の紅葉を楽しむ

8期(昭和44年卒) 相原 敬

この秋、私の誕生日に同期の拓哉とオギヤーが駆けつけてくれて、紅葉の妙義を歩く機会を得た。奇峰怪石で知られる妙義山を彩る秋の風情に、改めて旧交を温め、嬉しくも楽しい一日を過ごした。

昨年に続き、この一年も拓哉にはお世話になった。今年はアイスクライミングという新たなジャンルに挑戦することになった。遅きに失した65の手習いである。全ての山行において妻同行である。

☆ 氷の部

1月 霧積温泉で初トライ

2月 吾妻不動滝 神津牧場南野牧氷瀑

3月 新治不動滝

アイスクライミングはバイルとアイゼンを交互に打ち込みながら氷壁を登るので、岩登りよりもルートを選ぶ自由度は高いが、基本は変わらない。見ている限りでは簡単なようでも、やってみて身体のこなし（ムーブ）が重要であるということが分かった。頭では理解できても身体がままならず、わが身のふがいなさを思い知る場面が多くあった。技術と勘を習得するには場数を積む以外にないのだろう。「習うより、慣れる」とはよく言ったものである。基礎体力の向上も課題である。



新治不動滝



神津牧場南野牧氷

最近クライミング人口も増えたので、何処に行っても過密気味で、落石ならぬ落水にも気を配らなければならない。寒さも厳しい。

☆ 岩の部

4月 裏妙義木戸壁右カンテ 榛名黒岩 御在所岳藤内壁前尾根

5月 小川山涸沢岩峰群Ⅱ峰 6月 一ノ倉烏帽子沢奥壁南稜

10月 幽ノ沢V字岩壁右ルート（以下報告）

未明4時に土合のRW駐車場を出て幽ノ沢出合まで旧道を歩き、夜明けを待って入渓した。前日までの雨で、濡れて滑る沢登りを強いられた。白い花崗岩のカルボーデンに出れば、明るく、開放感に溢れる。天候も味方して、青空に映える岩壁が屏風のように聳えていた。

カルボーデンの上部からアンザイレン。心配していたトラバースも快調に抜けて、いよいよ岩壁登攀が始まる。過去に登った一ノ倉沢のような高度感、露出感は控えめであるが、一ノ倉沢ほどメジャーなルートではないのでランナウトする箇所が多く、リードの拓哉は慎重に登っていった。6時間をかけた12ピッチの登攀を終了し、普通ならば「お疲れ様」となるところであるが、中芝新道に抜けるための石楠花尾根の急峻な笹藪漕ぎが隠れた核心で、最大のピンチであった。小1時間の緊張から開放された堅炭尾根からの展望は、感慨深いものがあつた。武能岳が目の前に大きい。

堅炭尾根から芝倉沢に下る中芝新道は破線の一般ルートであるが、急斜面ゆえに下りで使う登山者



幽ノ沢カルボーデン突入



谷川岳幽ノ沢岩

はあまりいない。傾きかけた夕陽にせかされてバンバン下るも、芝倉沢の途中で完全に日が暮れてしまった。ヘッドランプに沢を下り、旧道をポコポコ駐車場まで戻った。沢登りに始まり岩壁登攀、バリエーションあり、急峻な尾根下りに暗闇のルーハンもありで16時間半の長丁場だった。まさに「一生に一度の幽ノ沢」となり、今になっても達成感に浸ることのできる忘れられない山になった。

日本のクラシックルートを登る！ 撮る！

8期（昭和44年卒）佐藤 拓哉

「日本のクラシックルートをシリーズでビデオを作りたい」・・・ビデオ編集を生業としているクライミング仲間の想いを知ったのは7年前のことであった。「クラシックルート」という響きは、アルパインクライミングにのめり込んだ私にとっても心地よい響きであった。

記念すべき最初のルートは、誰でもが憧れる谷川岳一の倉沢衝立岩の頭まで登るルートであった。2006年6月、朝日に輝く岩壁を眺めながら、オギヤー、カメラマンのSさんと3人で一の倉沢の雪渓を登っていった。雪渓を渡ってくる風は冷たく、身が引き締まる思いであった。テールリッジの滑りやすいスラブを注意深く登り、衝立岩・中央稜の取付きに着く頃には太陽が大分高くなり、暑いくらいになっていた。見上げると、いかにも脆そうなハング帯を持つ衝立岩が頭上に覆い被さってくるようである。真横には、自衛隊が宙吊りになった遭難者のロープを狙撃して切ったことで有名なダイレクトカンテルルートのいかにも厳しそうな岩壁がすぐ目の前に見える。

中央稜は一の倉沢のメインエリアである衝立岩と烏帽子沢奥壁の丁度真ん中を、衝立岩の頭まで登るルートである。エリアの一番奥にある烏帽子沢奥壁・南稜とともに人気ルートであり、休日には1時間以上待たなければならないことも珍しくない。この日は休日には珍しく、我々だけであり、4ピッチ目と6ピッチ目の核心部もゆったりとした気持ちでクライミングを楽しむことができた。昼前には頭まで抜けることができた。

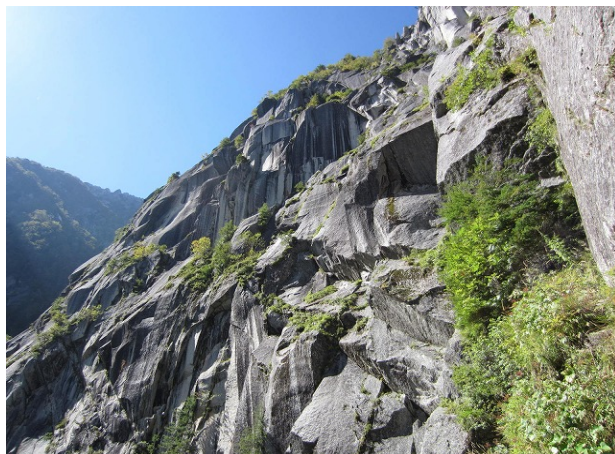
その後、谷川岳の一の倉沢や幽ノ沢、錫杖岳・前衛壁、黒部の巨人・丸山東壁、北穂高岳・滝谷ドーム、端牆山・大面岩、八ヶ岳・大同心、甲斐駒ヶ岳赤石沢・Aフランケ、前穂高岳・屏風岩などを登り続け、7年間で19ルートのビデオ撮影をした。

最も印象深いのは、今年の夏に登った甲斐駒ヶ岳赤石沢・Aフランケ・赤蜘蛛ルートである。甲斐駒ヶ岳は山全体が花崗岩でできており、頂上付近は夏でも雪が積もっているように白く見える綺麗な山である。中でもAフランケと呼ばれている岩場は、写真でも分かるように、日本で最も美しい岩場であろう。

この魅力的な岩場を登るために、あの厳しい黒戸尾根を8合目まで登り、それから赤石沢の底目掛けて数100m下らなければならぬ。このアプローチの厳しさのため、訪れるクライマーは稀である。我々は黒戸尾根の登りを避け、芦安から北沢峠までバスで行き、甲斐駒頂上経由とした。それでも、峠から頂上まで1000m以上の登りがあり、厳しいことには変わらない。重い登攀用具を担いで、初日は黒戸尾根の8合目の岩小屋まで行き、二日目に登った。ビデオ撮影しながら、というこ



赤蜘蛛ルート核心部の登攀



甲斐駒ヶ岳赤石沢Aフランケ

ともあり、その日は同じ岩小屋に泊まり、三日目に帰ってきた。

赤蜘蛛ルートは最も人気のあるルートである。人工登攀（アブミを使いながらの登攀）主体のルートであるが、垂直（上は浅張り）の壁に走るクラックを登る核心部の6、7ピッチ目は、現在ではフリー（アブミなどを使わず、手と足だけで登る）化されている。非常に難しいフリールートであり、ほとんどのクライマーは昔ながらのスタイルで登っている。我々はクラシックルートの撮影が目的であり、もちろん人工登攀とした。それでも非常に厳しい登攀が続き、岩小屋に戻った時にはすっかり疲れ果てていた。充実感溢れる疲れでもあった。

谷川岳縦走報告

第8期（昭和44年卒）前田 吉彦

昨年、高校生の頃から憧れていた縦走路踏破を半世紀近く経って実現した。若い時は技術や装備が無く、会社に入ったら時間が無く諦めていた。しかし色々融通が利く年齢になり、一念発起し山行企画を練った。憧れの縦走路は平標山から真東方向の谷川岳に伸びる上越国境線。途中避難小屋はあるものの一日の歩行距離は20kmを越える。

一昨年6月には会社の後輩と天神尾根から谷川岳から茂倉岳経由土樽のプレ山行実施。縦走決行は日が長く、しかもビバークの折水確保が容易な翌年6月と定め、準備を始めた。

初日は6月4日車で土合駅に。ここからJRで越後湯沢へ。車中から明日通過予定の万太郎山が遠くに望める。更に苗場スキー場行きバスに乗り継いで、平標山登山口で下車。晴天の下、汗ばみながら2時間半の登りで稜線上の平標山の家へ。明日行く、新緑と残雪のコントラストが美しい仙ノ倉や怪奇な姿のエビス大黒ノ頭が目の前に広がっている。夕飯まで時間があるので、2時間掛けて南方の大源太山を往復。ツバメオモト、シャクナゲなどが咲きほこり、優雅な時間を過ごす。今宵の宿泊者は我々だけだとか。

翌朝は2時半起床、まだ寒く暗い3時55分出発。木製の登り階段が続くが、残雪で寸断されている。4時50分平標山到着、普段は登山者が多いが、今朝はまだ誰もいない。明るくなってきた草原を横切り、次のピーク仙ノ倉に5時50分到着。仙ノ倉は谷川連邦の最高峰だが標高は2026mしかない。この付近の森林限界は1500m程度のようなのである。仙ノ倉山頂からは、大きな万太郎、その先に谷川岳のツインピークも見えるが遠い。遠い。

ここからは我々にとって未踏の稜線。シラネアオイのお花畑を急降下し、狭い岩尾根を進むとエビス大黒ノ頭6時50分。南の赤谷側は急峻な崖で、吸い込まれそう。北側の谷から雲が湧き上がるものの、引き続き展望の良い狭い尾根をひたすら歩く。標高1568mの毛度乗越7時40分。笹原が広がる長い万太郎山の登りとなる。東俣の頭を巻いて、ようやく万太郎山に達する。9時10分、小屋を発って5時間強。道半ばなので、30分の大休止。赤谷川本谷源頭を囲む山幅には残雪が多い。

元気を取り戻したところで、ハクサンコザクラ等のお花畑の中をアップダウンしていく。大障子ノ頭10時25分、小障子ノ頭11時10分、オジカ沢ノ頭12時到着。ここまで来ると先が見えてきた。しかし、



恵比寿大黒の頭付近から仙ノ倉を振り返る



万太郎山から赤谷川源頭を望む

中ゴー尾根の分岐付近で雷鳴、雨も降り始めた。雨具を着たり脱いだり、時間はどんどん経っていく。やっと谷川岳直下の肩の小屋に着いたのが13時40分。小屋は雨宿りの人で混雑、通い慣れた天神尾根を駆け下る。雷雨が一層悪化、熊穴沢ノ頭避難小屋で30分停滞。結局天神平ロープウェイ駅に着いたのは15時55分。本当に長い一日であったが、締めは麓の温泉宿で祝杯。

今手元に厚いアルバムが一冊残った。これからも何かに挑戦できればと願っている。

(謝意：本稿は同期の相原君の奨めがあって、綴った。彼に感謝する)

北欧旅行 劔岳、西穂高岳登山

10期(昭和46年卒) 田中 康則

今年の夏は久しぶりに、海外旅行をすることにした。デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランドの北欧四カ国の旅行です。

8月8日(水)に成田からヘルシンキ経由でコペンハーゲンへ。9日(木)はクロンボー城などの市内観光。夕刻には大型客船にてオスロまでの16.5時間の魅惑の船旅。北欧風ヴァイキングとワインで話もはずみ楽しいひと時でした。10日(金)はオスロ市内観光。午後はいよいよ私の旅行の目的であるソグネフィヨルド地区への6時間の山岳ドライブ。快適なドライブでした。11日(土)快晴のなかソグネフィヨルドを2時間のクルーズ。その後はフロムでフィヨルドを眺めながらのんびりと時間を過ごした。午後からは車窓の旅で有名なフロム山岳鉄道とベルゲン鉄道の旅。ショスの滝など風景を満喫しながらベルゲンへ。北海に面した最北の港町ベルゲンには夏の終わりの哀愁が漂っていた。夜遅くまで賑わう街を散策し、楽しい一日が終わった。12(日)はベルゲンから空路ストックホルムへ。ドロットニングホルム宮殿観光。13(月)ノーベル賞授賞式で知られる市庁舎などを観光。午後空路ヘルシンキへ。市内観光。14日(火)思い出を楽しみながらの市内観光。夕方空路成田へ。15日(水)成田着。市内のホテルに駐車しておいた車で自宅着。

9月15日(土)よりの連休は劔岳に登山。コースは前回と同じ。10月6日(土)よりの連休は西穂高岳、焼岳の登山。昨年と同じ。

北欧旅行も北アルプス登山もほぼ快晴で今年も天候には恵まれました。



近況報告

20期（昭和56年卒）の佐々木晃（ささき農園）です

筑波山麓での百姓暮らしも12年目になりました。最近では農産品から放射性線物質が検出されたニュースを聞くことも少なくなりましたが、春までは茨城県内でもタケノコなどからセシウムが検出されたため、山菜類の出荷には検査が義務付けられ、我が家でも栽培しているワラビとシイタケの検査を依頼しました（結果は測定限界値未満）。落ち葉堆肥の扱いにもまだ制限がかかっている、何かと不便です。5月にはつくば市で大きな竜巻が発生し、激しい雹も降りました。夏は史上最高に迫る猛暑旱魃、この冬は暖冬から寒い冬に予報が一転するなど気象の変化は激しくなるばかりです。野菜作りも経験だけでは対処しにくくなっていますが、相も変らぬTUWV仲間の定期的な応援のおかげで楽しく続いています。農作業（の合間にビールを飲んじゃったりしながら）で身体を動かし、温泉で汗を流したあとはバーベキューや鍋を囲んでの宴会なので楽しくないわけがなく、もはや月に1回のこのイベントのために農業をやっている観さえあります。今年は森田（23期）が初参加。ただ、常連メンバーのうち本郷（20期）が3月に転職して土浦から京都に転居、笠原さん（18期）は八ヶ岳のふもとに購入したセカンドハウスへの移住の準備に多忙で、来年は戦力ダウンの不安があり、新たなメンバーの参加が望まれます。

22期（昭和58年卒）西川雅明です ニロトレランです

いつか走りたいと思っていた二口を8月に走った。夜行バスで山形に行き、山寺に着いたのは早朝。スタートしてから笹谷峠まで、途中出会った登山客はひとりだけだった。タイムは次のとおり。

平成24年8月18日（土）

面白山高原 7:00--(55)--南面白山 7:55~8:00--(40)--小東分岐 8:40--(小東岳往復 25)--小東分岐 9:05--(20)--小東峠 9:25--(30)--糸岳 9:55~10:00--(15)--二口峠 10:15--(20)--清水峠分岐 10:35--(25)--清水峠 10:50--(30)--山形神室分岐 11:40~11:45--(仙台神室 60)--山形神室分岐 12:45--(60)--笹谷峠 13:45--(15)--関沢手前 14:00

ワングル時代に不思議と一度も立ち寄ったことがなかった仙台神室に初めて行った。しかし、二口の稜線は藪がひどい。手足は傷だらけになった。二口は決して夏に走るところではない。それがこのランの反省点だった。



22期（昭和58年卒）利根川です

今年は会社の構造改革で勤務地の相模原事業所を閉鎖、7月から東京（神保町）勤務になりました。仕事も大きく変わり、7時には電車に乗り、帰宅は0時すぎ、体力勝負の日々が続いています。

8月以降、欧州経済危機が伝わるスペインとポルトガル、尖閣問題で騒がれる中国、香港、マカオを訪問する機会がありました。苦戦する日本の物づくりの現場、激動する世界経済や政治の流れなど、世の中の動きを自分自身の目や体で体験しています。

（写真：ユーラシア大陸最西端のロカ岬にて）

2012年8月から、電子メールアドレスが以下の通り変更になりました。電子メールアドレスの管理人は今後も続けていきます。よろしくお願いします。

旧：GWT00287@biglobe.ne.jp → 新：s-tonegawa@ac.auone-net.jp



新 年 会 の お 知 ら せ

新年会は毎年1月の最終金曜日にいつもの所で行っています。

2013年1月25日(金)18:30 (会費は8,000円の予定)

新橋駅のすぐ近くにある**新橋亭(しんきょうてい)新館(TEL 03-3580-2211)で行います。**

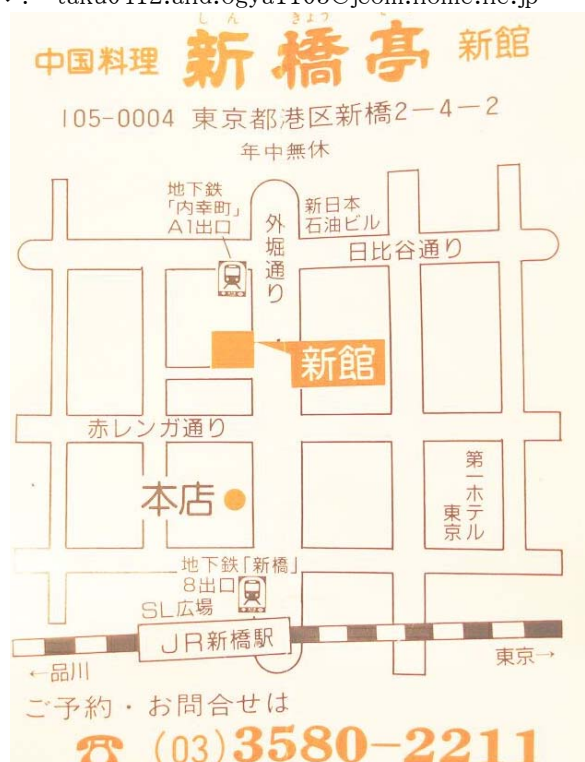
お誘いの上ご出席下さい。特に若い人の出席は大歓迎です。遠くの方でも東京に出張などで来るような場合には、ぜひ出席して下さい。飛び込み大歓迎です。逆に、出席ということになっているのに欠席される方も結構います。これは本当に幹事泣かせ。**予定が変わった時は早めにご連絡**下さい。

連絡先 佐藤拓哉 Tel 046-841-8622 メール: taku0412.and.ogya1103@jcom.home.ne.jp

<2012年新年会出席者>

(S39)岡好宗、松木功 (S40)小原佑一、
島崎質、関川利男 (S41)朝倉肇、大田光二、
桜洋一郎、渋谷尚武、瀬尾勝之、谷正美、
藤田凱已、八木真介、横山雄一郎、吉田公平
(S42)安達丈夫、加藤邦明、堤正尚、
青木祐二 (S43)石川誠之、大釜寛修、
菊谷清、高橋直樹、藤森英和、村山貞一、
上田俊郎、山口正雄 (S44)小笠原弘三、
佐藤拓哉、水上俊彦 (S45)伊藤健一、
富川正夫、原田博夫、桃谷尚安
(S46)田中康則 (S47)秋田修、池田重則、
園部式正 (S48)神山文範 (S49)岡部安水
(S51)堀江博 (S62)伊田浩之

以上42名



TUWVOB会 2011年会計報告

(東京口座)

1. 収 入

前回から繰越	379,688
利息	68
計	379,756

2. 支 出

会報 印刷	3,990
送料	2,880
事務用品、通信他	2,130
次回繰越	370,756
計	379,756

★★ 事 務 局 よ り ★★

- ◇ OB会報43号をお届けします。今回も多くの方から原稿を送っていただき、ありがとうございました。山を続けている人、山から遠く離れてしまった人と様々ですが、同じワンゲルの飯を食った仲間であることには変わりはない。
- ◇ メールアドレスを管理している利根川さんのメールアドレスが変わりました。変更になった方は、1ページ目の頭のメールアドレスまでご一報下さい。
- ◇ OB会のホームページに女川レポートのコーナーを新設しました。
- ◇ OB会費の徴収は廃止になりました。
3年前に会費の徴収は廃止になりました。